

横浜学と横浜学シンポジウム

吉田迪矩

一——都市学、地域学について

都市学、地域学（以下「地域学」という）とは比較的新しい用語法であり、その定義も研究方法も決められたものがあるわけではない。むしろそれはそれぞれの研究者によって異なるし、またその都市、地域なりのやり方があると思われる。

これまでの都市研究は、どちらかというと一定の理念を持ち、その都市をいかにその理念や制度に近づけていくのかということに関心があつたように思う。これに対して地域学は、その都市のあるがままの姿や成り立ちを認め、そこに住むことの意味やその土地の独自性を求めていくことに特徴があるように思う。

また、郷土史がある地域の研究に深く関与するのに対し、地域学は他都市との比較等むしろ開かれた地域研究であると言えるか。

私たちの生活は、その土地の自然や風土に規

制されるものであるとともに、そこに住んだ人々が長年にわたって築いてきた歴史や文化、生活スタイルを受け継いで成り立っている。

例えばヨーロッパのある都市では、毎日一定の時刻になると一斉に教会の鐘が鳴り響くという。この鐘の音は、何百年も前のその土地の市民も同じように聞いている。また、恐らく将来そこに住むであろう人たちも聞くはずである。この鐘の音は時代を超えてそこに生活する人たちに共通の一体感を与えるものである。

都市という居住形態は二千年以上の永い歴史を持ち、人類は都市を中心に歴史と文化を築いてきた。

今日、国際化、情報化が急速に進みつつあるとしても、その多くは都市によって担われていくものと思われる。都市は独自性、個性をもつことによってこそ国際性、普遍性を持つであろうし、都市が持つ情報結節点としての機能は、その都市が持つ魅力、住みやすさ、集まりやす

さ等によって担われていくのであろう。

二——各地の地域学

地域学のカテゴリーに入る研究は、相当以前から枚挙にいとまのないほどなされてきた。しかし、そこに都市や地域の名前を付けた研究で、極めて早い時期に生まれてきたものに沖繩学がある。沖繩学はその文化的、民族的独自性を求めて戦前から活動を続けてきた。

地域学が一つの潮流として表れてきたのはこの十五年ほどのことである。明らかに高度経済成長以降のことであって、その時期は全国的な地域おこし運動と一致する。これはその地域に本当に根ざした地域づくりをしようとする動きが、地域学に理論根拠を求めようとするかの如くに見える。

都市科学研究室では、平成元年度及び二年度の二カ年で「横浜学基礎調査」を実施しており、

その中で四都市の地域学の調査を実施した（別表参照）。

簡単な説明を付け加えると、長崎学は江戸時代における長崎の国際交流を基本的なアイデンティティーとし、それを現代に生かして県民意識の一体性を醸成しようとするものである。

神戸の場合、一部の大学の講座や新聞等で神戸学という名称が使われているが、神戸学というものが明確に形づくられているわけではない。そこには改めて神戸学で神戸のアイデンティティーを探る必要はないという神戸っ子の自負さえ感じられる。

事実、神戸っ子は職場はたとえ大阪でもアフターファイブは地元という人が多いようで、生活レベルでの神戸の魅力は相当なものらしい。

掛川学は多くの側面を持つが、主として市民の生きがいづくりのための生涯学習という行政目的に沿って進められている。その中心人物は榛村市長自身であって、市の多くの行政が生涯学習運動と結び付けられ、住みよい郷土作りが強力に進められている。

江戸東京学は、近代化の過程で失われてきた江戸から明治前半期に形づくられた庶民の生活、都市コミュニティ、都市景観等を研究し、その現代的意義を明らかにする。例えばそれは江戸、東京市民の持っていた生活のゆとり、高い

文化水準、水の都江戸・東京等である。

その成果は既に出来つつあり、小木新造氏が中心となってまとめた「江戸東京事典」が市販されている。またこれとは若干離れた行政においては、東京都が江戸東京博物館を建設しつつある。

三——横浜学とは

「横浜学基礎調査」では横浜にかかわりのある有識者三十二人の方に、横浜に関するアンケート調査を実施した。この中で多数の有益な御指摘をいただいているが、特に横浜の特性については多くの方が港や海の景観、また中華街や外人墓地等の外国人にかかわりの深い施設を挙げている。

こうした点から横浜の都市としての特性を位置付けてみると、横浜は、(一) 日本における近現代の国際交流の場、(二) 外国文化の流入、定着とその国内への伝播の中心地であったこと、(三) 国内からの人、物、文化の流入が著しかった場所、ということになるだろうか。

横浜のこの百三十年の変化は激しいものであった。港を中心として発展した町が商業都市へ、さらに工業と住宅を含んだ大都市となった。横浜にはどのような人も事物も受け入れた

「開放性」があり、異質な人、物、文化が「共存」し、また「交流」している。さらに「国際性」や「開放性」にもとづいて新しい文化を創造したという「先進性」を持っている。このようなキーワードから、まだ発見されていない多くの横浜が見つけ出せるはずである。

横浜の誇る自然資源は何といっても海であろう。しかし海だけではない。鶴見川や帷子川、大岡川、柏尾川等の流域と谷戸や斜面緑地がある。そしてそのうえには丘があり、その丘には新しい市民が住んでいる。そこからも新たな横浜が生まれつつある。

横浜に関する研究や出版がどの程度なされているか知る由もないが、社会経済的な横浜研究から郷土史、個人の伝記まで含めると相当な数にのぼる。

そんな中で、識者が共通して推せんする本は横浜市立大学経済研究所の編集による「横浜経済・文化事典」(昭和三十三年三月刊)であろう。対象年代は一八五九年から一九五八年までの百年にわたり、七編八百項目にのぼるものである。

本市総務局市史編集室の「横浜市史」の編集作業は、大正九年に始まり、途中戦争をはさんで二十年ほどの中断はあったが現在も続いている。ぼう大なものである。

開港資料館は、昭和五十六年設立以来開港期を中心に多くの貴重な研究を続けている。

こうした基礎的、先駆的な事業が進められるなかで、昭和五十年代になって横浜に関する大学の学生向け市民向けの講座がぼつぼつ現れてきた。

昭和五十年代後半には、「横浜」の冠を付けた民間研究団体が生まれてくる。さらに行政でも教育文化センター市民大学講座で「横浜論」の連続講座を実施するに及んで、ほぼその萌芽は出そろってきた。

横浜学基礎調査でヒアリング調査を実施した関係団体は、大学九、民間団体十一、出版七、行政三、合計三十にのぼる。

これらの団体は相互に共同研究するとか、共通の議論の場を設けるということはあまりなく、それぞれ独自に活動しているように思われる。従って共通の交流の場所をつくることによって連携がなされ、また大学、研究機関と市民の研究が結びつくことによって、横浜学が飛躍的に発展する時期が到来しているものと推察される。

横浜学を開かれた、自由な研究とし、ふるさと意識がますます高まっていくための連絡組織として、横浜学研究会議のようなものがないだろうか。

四——横浜学シンポジウムの開催

横浜を知ること学ぶことは、横浜で生活することの積極的な意味を見つかることであり、横浜を愛することへとつながっていくことである。先に述べたとおり、横浜には素晴らしい伝統と将来に向かって大きく発展していく可能性があるので、研究テーマにこと欠くことはない。横浜学が発展していくことによって、専門的研究も市民の研究も豊かに実っていくであろうと思われる。

しかし、現実には横浜学はまだ一部の人の研究テーマであり、その存在もあまり知られていない。そこで「横浜学シンポジウム」は、横浜に対する親しみや魅力を再確認することによって多くの人を横浜学へと誘い、また専門的に研究をしている人々に対しては、交流の場所を設けて議論と連携の輪を広げていこうとするものである。

「第一回横浜学シンポジウム」開催の概要は次のとおりである。

- (一) 基本テーマ 横浜：きのう・きょう・あした
- (二) 開催日時 平成二年十二月十五日(日) 午後一時三十分から

(三) 開催場所

第一部 横浜市開港記念会館講堂

第二部 横浜国際会議場(厩舎ホール)

(四) 第一部講演者等

- 記念講演 木村 尚三郎氏
- トークショー 有馬 真喜子氏
- 中村 實氏
- 小宮山 洋子氏

(五) 第二部地域学交流集会

- 掛川学、江戸東京学、神戸学、横浜学からの報告及び討論

多くの方の御参加をお願いしたい。

五——今後の方向と課題

日本の都市は基本的に中央志向的であって、そのために都市固有の独自性が弱い。とくに横浜は東京という世界有数の大都市に隣接しているために、その圧倒的な影響を受けている。また戦争やその後の経済発展によって住民の移動が極端に激しかった。

このため横浜固有の文化や伝統が保持され、また育っていく余裕と条件が貧しかった。むしろこれから将来に向かって、それを大きくしていく可能性を高めていく必要がある。横浜の激しい変化と混沌とした現実の裏側に今もかくれている横浜らしき、あるいは郊外部の住宅街に

育ちつつある新しい横浜を追い求めていくこと
によって、豊かな横浜が形づくられていくので
はなかるうか。

人口三百二十万人、面積四百三十一平方キロ
メートルの横浜を共通の横浜らしさでくくるの
は、至難の技であるという意見があるが、横浜
学は各地域にある独自性、多様性を尊重した
い。むしろ横浜学は区レベル、地域レベルの地
域研究を含んだ豊かな内容のものに発展してい
かなければならない。

都市科学研究室は今後とも多くの点で横浜学
にかかわっていくであろうが、考えてみれば市
の行政そのものが横浜学の宝庫でもある。各局
区ともそれぞれの立場で横浜を意識しながら事
業を進めている。

ちなみに「調査季報」第九九・一〇〇号のバツ
クナンバーを御覧いただきたい。ここに掲げて
ある多くの論文は横浜学の各論として位置づけ
できるのではないか。

横浜学基礎調査及び横浜学シンポジウムの企

画を進めて行く過程で、多くの方から貴重な御
意見をいただいた。

庁内では、自分の仕事をするかたわらに横浜
に関する貴重なデータを蓄積されている方がお
られた。

そこで提案したい。是非「私の横浜学」をつ
くっていただくではありませんか。そしてその発
表の場として「調査季報」を提供することも検
討してまいりたいと考えている。

△企画財政局都市科学研究担当課長▽

別表
他都市地域学一覽表

	現状				対象	特徴	事業	人
	大学	行政	民間	学				
崎	<ul style="list-style-type: none"> ・長崎を中心とした歴史文化等を全国的・世界的視野でとらえる。 ・長崎の歴史文化を掘り起こし地域文化の活性化を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・県が地域活性化は長崎学を導入。広く長崎県民に長崎学の成果を知ってもらうとの主旨でできるところから始めている。 ・市は関わっていない。 ・県、市の図書館、博物館が貢献 ・民間の側からは行政にできることには限りがあるとの意見がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究は民間が中心で活発 ・長崎学は戦前、戦士史研究団体である長崎史談会から生まれ人を通じて継承発展した経緯がある。 ・市民の文化性は高く文化活動は活発である。 ・ボランティアする企業もある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長崎に関わるすべてだが、どちらかという歴史や文化に偏る傾向がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・越中哲也純心女子短大が捜索中心として展開 ・人や人と人のつながりが発展。 ・あまりお金をかけずに発展。 ・中央にも研究者がおり普遍性が強い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・振興懇談会による提言 ・本、ビデオ、機関誌 ・新聞による連載特集、テレビドラマ ・講座、文化サークル ・史跡めぐり 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学研究者、博物館関係者を中央に形成 	
長	<ul style="list-style-type: none"> ・地域おこしという表層的なテーマでなく、地域の特性や本質を身覚え、自ら地域像を再発見し活性化の青写真を描く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・神戸市外大、神戸学院大に特殊講義「神戸学」(参考) ・甲南大に総合科目「神戸学」(参考) ・学生に神戸の社会人が何をやっているか知ってもらう。 ・学際的、国際的な学者の交流の場をつくり、刺激しあう。 ・都市経営として都市問題を研究する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・神戸市外大、神戸学院大に特殊講義「神戸学」(参考) ・甲南大に総合科目「神戸学」(参考) ・学生に神戸の社会人が何をやっているか知ってもらう。 ・学際的、国際的な学者の交流の場をつくり、刺激しあう。 ・都市経営として都市問題を研究する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・神戸市外大、神戸学院大に特殊講義「神戸学」(参考) ・甲南大に総合科目「神戸学」(参考) ・学生に神戸の社会人が何をやっているか知ってもらう。 ・学際的、国際的な学者の交流の場をつくり、刺激しあう。 ・都市経営として都市問題を研究する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・神戸学は始まったばかりだが、学際的な諸分野の研究団体等的人なネットワークがあり、活性化するとみられる。 ・「地域研究」という学問分野の応用を考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・神戸学としては講義のみ。(参考) ・太平洋フューラムは太平洋諸国をまわる洋上大学を表現 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の講師は民間から多数参加 	
神	<ul style="list-style-type: none"> ・近代化の過程で失われた江戸時代の生活のとり、人情味ある人間関係、都市景観など先人の知恵を現代にいかす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸東京学事典に關内秀信法政大学助教授、竹内誠東京学芸大学教授、芳賀東京大学教授が参加。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都が都文化振興のため「東京ルネッサンス」と名うち六半間にわたり連続してイベントを開催している。 ・その一環として「江戸東京自由大学」というセミナーを開いたり、江戸東京博物館の開設を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸及び東京の都市としての特徴、歴史。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小水氏の強いリーダーシップで様々な活動が実現している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸東京学事典の出版 ・東京ルネッサンスで江戸東京自由大学開催 ・江戸東京博物館の設立予定。小水氏が中心になり昭和62年に江戸東京学事典を出版 	<ul style="list-style-type: none"> ・小水が中心メンバー。江戸東京学事典では大学関係者が参加。 	
江	<ul style="list-style-type: none"> ・ローカルライオンを市民全体がもつようにする。 ・学際的な市民資質向上運動 ・生涯学習の一つとして位置づけ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・市民対話を活発に実施。 ・市長が広報に担当し学事始めとしてレポートを毎月掲載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史、文化等すべてを対象。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行政が強力に推進。 	<ul style="list-style-type: none"> ・広報に市長レポートを掲載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・市長が中心。 		
東	<ul style="list-style-type: none"> ・市民対話を活発に実施。 ・市長が広報に担当し学事始めとしてレポートを毎月掲載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史、文化等すべてを対象。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行政が強力に推進。 	<ul style="list-style-type: none"> ・広報に市長レポートを掲載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・市長が中心。 			
京	<ul style="list-style-type: none"> ・市民対話を活発に実施。 ・市長が広報に担当し学事始めとしてレポートを毎月掲載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史、文化等すべてを対象。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行政が強力に推進。 	<ul style="list-style-type: none"> ・広報に市長レポートを掲載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・市長が中心。 			
学	<ul style="list-style-type: none"> ・市民対話を活発に実施。 ・市長が広報に担当し学事始めとしてレポートを毎月掲載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史、文化等すべてを対象。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行政が強力に推進。 	<ul style="list-style-type: none"> ・広報に市長レポートを掲載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・市長が中心。 			